みんなちがってみんないい
～LGBTの理解と対応～

近年では、性のあり方は、一般的に言われる「男性」「女性」という２通り以上にもっと多様であるという考え方が広がってきています。

しかし、性的少数者については、依然として社会理解が進まず、偏見や差別、配慮に欠けた対応などで、自身の思いや悩みを打ち明けることが難しく、周囲の無理解に苦悩し、生きづらさを感じている状況など様々な問題があり、深刻な人権問題になっています。

性の多様性を認め、互いの人権を尊重することは、全ての人が自分らしく生きていける社会につながっていきます。

1.性的マイノリティの基礎知識

■ LGBT とは？

L：Lesbian（レズビアン） 女性の同性愛者

G：Gay（ゲイ） 男性の同性愛者

B：Bisexual（バイセクシュアル） 両性愛者

性的指向

T：Transgender（トランスジェンダー）“心の性”と“体の性”との不一致 性自認

LGBTという言葉、これは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとったもので、性的マイノリティ（少数者）を表す総称の1つです。主に性的指向と性自認に分けられます。

【性的指向】「L・G・B」は、性的指向に関わる類型で、どのような性別の人を好きになるか、恋愛や性愛の感情の方向を表します。

自分の意志というより多くの場合に思春期の頃に気付くもので、具体的には、恋愛・性愛の対象が異性に向かう異性愛、同性に向かう同性愛、男女両方に向かう両性愛、それと無性愛があります。

【性自認】「T」は、性自認に関わる類型です。自分の性をどのように認識しているか、「心の性」とも言われる心理的な自己の 性別の認識です。多くの場合、性自認は 身体的性別と一致していますが、トランスジェンダーの場合は一致せず「自分の体は男だが心は女だ」などのように認識し「心の性」が一致しないため「身体の性」に違和感を持ちます。

■ LGBT以外のマイノリティ

LGBT以外のその他のマイノリティとして、クエスチョニンング（Q）（自分の性別や性的指向に確信が持てない、または決めることに不安を感じている状態の人）、アセクシュアル（無性愛者）など、LGBTの分類に収まらない類型も多くあります。

LGBTにこのQをとって「LGBTQ」とも言います。また＋（プラス）を付けて「LGBTQ＋」や 複数形の「s」を付けて「LGBTs」とも言います。性的マイノリティといっても多様な人がいるため、容易に一括りにすることができないわけで、性のあり方は、グラデーションであるとも言われています。

最近では、LGBTと似た用法として「SOGI（ソジ）」という言葉も広く使われるようになりました。これは性的指向（Sexual Orientaion）と性自認（Gender Identity）の頭文字をつないだものです。

■ 性的マイノリティへの割合

電通が２０１８年１０月に全国の６万人を対象に調査を行い、その結果、LGBT に該当する人は全人口の8.9％だったとあります。

そのほか色々調査があり、明確な数字が出ているわけではありませんが、日本における LGBT の割合は、大体一割程で、さらにこの LGBT 割合は増える傾向にあり、若い世代ほど LGBT である割合が高い傾向にあることが分かってきています。なぜ若い世代で LGBT が増えているのか。先の東京オリンピックにトランスジェンダーの選手が出場したことなどから、世の中が、性の多様性についての意識が寛容になり LGBT への理解が進んできていること、そのことから自身が LGBT であることに悩んだりする人も徐々に減り、自身のセクシュアリティ（性のあり方）が受け入れやすい時代に入ってきていることがあるのではないかと思います。

多くの LGBT の人は、自分が LGBT であることをオープンにはしません。秘密にしているとか 隠している というよりは、わざわざ言うことでもないという感覚が近いでしょう。

以前よりも LGBT の認知が広がり、LGBT を差別するようなことは減ってきましたが、やはり まだまだ生きづらいのが現状です。自らオープンすることはなかなかできないと思われます。

2.性的マイノリティの子どもへの配慮に係る対応

■ 学校での差別やいじめ

思春期には、いじめや からかいの対象になることが多く、学校でもマイノリティであるがゆえに、心のありようや恋愛対象について、好奇のまなざしを向けられることが多い。

「男のくせに」「おかま」「ホモ」「レズ」（※） などと侮辱的な言葉を投げかけられ、自尊感情を傷つけられる。

※一般的に「ホモ、レズ、おかま」は、差別的ニュアンスを含んでいるとされており「ゲイ」「(レズ)ビアン」と呼ぶことが推奨されている。

学校という単位でみると、クラス内におおむね１～２人は存在する計算で、出会ったことがないのではなく、出会っているのに気づかないでいるのです。そのような子どもの中には、内なる悲鳴をあげて人知れず苦しんでいる子もいるかもしれません。

■ 学校での児童生徒への対応等

▶小学校では、男女の区別がはっきりする場面はそれほど多くはないが、中学校からの学校生活では、男女の違いがはっきりしてきます。制服、列、体育、座席、部活・・・。一つ一つの区別に性別違和を感じ、学校生活が苦痛となる。

▶思春期は恋愛感情が強くなり、同性を好きになる場合、この頃にはっきりと自分は同性が好きであることを意識するようになり、肩身の狭い思いをしたり、自分自身に偏見を感じたりすることもある。友達との会話で本心がばれないように、好きでもない異性を好きだと言ったり、無理して異性と付き合ったりすることもある。

▶思春期は体が変化する時期である。男性なら、ひげ・声変わり…女性なら、乳房・生理…で変化が進まないように無理なことをしたりする。友人たちの体の変化にも、性別違和を感じる。

■ 安心して話すことができるためには

誰が性的マイノリティの当事者なのか分からない。当事者の彼らにとっては誰が本当の理解者か分からない。言ってくれないから、話してくれない、話してくれたらいいのに･･･こういった言葉や気持ちで児童生徒を責めないこと。知らなければ支援できないではなく、多様性を尊重する環境を整備すること、それ自体が支援になっていく。教員研修の実施、先生が LGBT についてポジティブな発言をする。授業の実施。グループディスカッション。不規則発言は放置しない。

■ カミングアウトについて

優しそう、動じない、秘密を守る人に言いやすい。 アドバイスを求めるよりも知って欲しいという意味も。「教えてくれてありがとう」の言葉で救われる。関係性を深めたいと思って打ち明けているので、カミングアウトはあなたを信頼している証。

■ 性的マイノリティの子どもたちにとって過ごしやすい学校とは

・ 相談しやすい環境があり、人がいる。

・ 生活しやすい施設の整備、配慮がなされている。

なによりも、教職員の性的マイノリティに対する正しい理解の促進がなされている。性的マイノリティの児童生徒にとって過ごしやすい学校は、誰にとっても過ごしやすい学校です。

▶トイレの問題 → 多目的トイレをつくっても、カミングアウトしてない子にとってはアウティングになる。「多目的トイレは誰も使える！」という共通認知で。

▶更衣室問題 → 本人の希望を優先

▶修学旅行問題 → １人部屋にしたら「場の共有」「話題の共有」「記憶の共有」を奪ってしまう。

※ 日ごろから「一人でない仲間意識」の場面を多くつくる。

■ 性同一性障害について

「性同一性障害」は、トランスジェンダーのうち性別適合手術等を必要とする方を対象とした医学的な診断名です。障害という言葉が使われていますが、２０１９年にWHOが精神疾患の枠組みから外し、健康に関する状態の性別不合に変更したことで、病気や障害ではなくなりました。性別適合手術を経ると、家庭裁判所に戸籍上の性別を改める申請を行うことができるようにもなります。 司法統計によると２０１５年末までに国内で6,021人の性同一性障害の人が戸籍上の性別を改めたとあり、この件で悩んでいる人は、一般に思われているより、ずっと多いのです。戸籍の性別に関する特例法（２００４年7月施行）により、性別の取扱いを変更できるようになりましたが、２０歳以上で、現に婚姻をしていない、外科的な手術が必要で未成年の子がいないことなど、要件は厳しいものとなっています。

■ 性同一性障害に係る子どもへの学校の支援の事例

服装 ： 自認する性別の服装・衣服や体操着の着用を認める

髪型 ： 標準より長い髪形を一定の範囲で認める（戸籍上男性）

更衣室 ： 保健室・多目的トイレ等の利用を認める

トイレ ： 職員トイレ・多目的トイレの利用を認める。

授業 ： 体育または保健体育において別メニューを設定する。

水泳 ： 上半身が隠れる水着の着用を認める（戸籍上男性）。

修学旅行 ： 入浴時間をずらす。

LGBT については、基本的には難しく考えすぎないことが大事です。性的多数者も少数者も当たり前のように存在し、それぞれに尊重されることが最も大事なことです。みんなちがってみんないいのです。ただし、性的指向（LGB）は理解するだけでよい（配慮は不要）ですが、性同一性、性自認（T）については、理解に十分な配慮が必要です。